



茅ヶ崎市教育センター

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報誌

学びあう響きあう

第18号

令和4年4月発行

編集担当/茅ヶ崎市教育センター
所在地:茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
★ 研究研修担当(市青少年会館3階)
☎0467-86-9965
★ 青少年教育相談担当(同館2階)
☎0467-86-9963
[URL]https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html

教育センターでは、「教育研究」・「教育研修」・「教育相談」の推進をしています。

「教育研究」では、小・中学校の教育に関する様々な研究を行っています。

「教育研修」では、研究成果を土台にした教職員の専門的な研修や市民の方々への家庭教育・幼児期の教育に関する講座などの機会を通して情報提供を行っています。また、長い歴史をもつ小学校中学校創意工夫・研究作品展も本教育センターが担当し、子どもたちの創意・研究心の育成に向けた取組を行っています。

「教育相談」では、児童・生徒の様々な悩みに応え、自律性をはぐくむ支援ができるよう努めています。

【Contents】

- 令和3年度「幼児期の教育・家庭教育」講座・講演会のあしあと(P.1)
- 幼児期の教育についての研究から見えてきたこと(P.1~5)
- 茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ(P.6,7)
- 青少年教育相談室から(P.8)

教育情報誌バックナンバーのページからダウンロードできます



令和3年度「幼児期の教育・家庭教育」講座・講演会のあしあと(3講座インターネット動画配信をしました。)

名称	開催日等	講師(所属/専門分野)・内容等
第11回響きあい教育シンポジウム 【web開催】 本市教育長と鼎談	【動画配信】 8/10~10/15	講師 ^{えんどうとしひこ} 遠藤利彦氏(東京大学大学院教授/発達心理学、感情心理学) ^{きたしまあゆみ} 北島歩美氏(日本女子大学カウンセリングセンター専任研究員) テーマ「不安な気持ち、どう向き合えるか?~子どものそだち・支えるコミュニティ」
令和3年度 幼児教育研修会 【web開催】	【動画配信】 9/6~11/12	講師 ^{そのだなつみ} 園田菜摘氏(横浜国立大学教授/乳幼児心理学) 講演「ほどほどの子育ての大切さ~アタッチメントを基盤として~」
令和3年度 茅ヶ崎市教育講演会	11/23(火・祝) 開催 【動画配信】 12/24~2/28	講師 ^{あきたきよみ} 秋田喜代美氏(学習院大学教授・東京大学名誉教授 /保育学、教育心理学、発達心理学、授業研究) 講演「学びに向かう力を育むために 今、大人が知っておきたいこと」

幼児期の教育についての研究から見えてきたこと ~12年目のあゆみ~

令和3年度は上記の3講座・講演会が開催されました。今号では、その中から2つの講座の内容を紹介します。

子どもの育ちを支える大人の役割とは何でしょうか。大人が「子どもの心に寄り添う」とはどういうことでしょうか。子どもの存在を受け止め、認めていくこと。子どもの心の動きを感じ、思いを馳せることなど、大人の子どもへの関わり方や心の持ち方について学ぶことができました。

令和3年度茅ヶ崎市教育講演会より

「学びに向かう力を育むために
今、大人が知っておきたいこと」
秋田 喜代美 氏



秋田喜代美先生

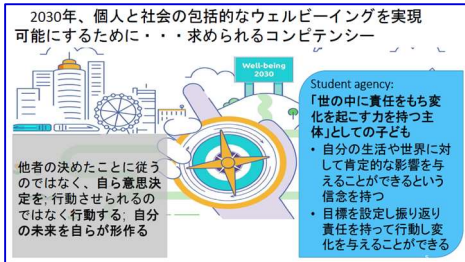
【社会を変革していく力】

Volatility (激動)
Uncertainty (不確実) VUCA
Complexity (複雑)
Ambiguity (曖昧)

VUCA(ブーカ) world。まさに先の見えない大変な時代です。地球温暖化、多文化共生、コロナの問題によって大きく変わり、様々な技術革新が起こる中、子どもに付けたい力とは何でしょうか。教科の内容や知識・ス

キルを身に付けるだけではなく、生涯使えるという力が求められ、資質能力・コンピテンシーとして捉えられています。OECD(経済協力開発機構)は、コンピテンシーを羅針盤(ラーニングコンパス)として捉え、知識や技能という縦の針だけでなく、価値と態度の横の針が大事なのではないかとしています。世界でテロが起き、知識や技能が自分たちの利害のために悪用されてはなりません。そのためには、価値や倫理観も育てるべきという

ことです。これからの時代は、自分で羅針盤を持って、自分の進む方向を選び、歩いて行ける子ども達を育成することが求められています。他者の決めたことに従うだけでなく、自分で意思決定をしていく。ルールに従うよりも、ルールを作る時代へ。個人と社会のウェルビーイング(誰もが幸せになる)を目指して、自分の未来を自分で作る子ども達を育てようということです。



Agency(エージェンシー)という言葉が OECD が重視しています。それが日本の学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の「主体的」という言葉と連動しています。Student agency(スチューデントエージェンシー)は、「世の中に自分で責任を持って変化を起こす主体としての子ども」という発想です。つまり「社会を変革していく姿勢」です。そのために、自分で自分のことを引き受け「責任を取り」、「新たな価値を生みだし」、違う価値観を持った「他者とうまく折り合いをつける」などの力を付けるのです。実は乳幼児期でも、子ども同士意見が違った時、うまく折り合いをつける方法を自分で考えます。新たな発想で、新たなものを生み出すことができたり、自分なりの役割で責任を取って掃除したりできます。その積み重ねが大人まで続いていくことによって、新しい社会を作り上げる、変革していく力が身に付いていくのです。

では、どのようにコンピテンシーを高めるか。「見通しを持ち、行動し、振り返る」サイクルが大事です。見通しを持つことは、「何か面白いことが起こりそう」とわくわくして予測することです。そして、実際に行動してみる。振り返ることも、見通しを持っているからどうだったのかなと思う。大人が先に「これをやりなさい」と言って、子どもが見通しを持つ間もなく先導すること、子どもが「今日はこうかな」と思いながら、見

通しを持ってわくわくして学びが始まることは大きく違います。

OECD のいう「学びの羅針盤のモデル」は、社会を変革していく力を備えるため、先程のサイクルを回しながらウェルビーイングを目指して学んでいく、その原動力が Student agency、責任を持って社会変革をしていく姿勢ということになります。新学習指導要領は、「何を学ぶか、どのように学ぶか、何をできるようにするか」この育てたい 3 本の柱を離すことなく大事にし、学校で得られる知識が、社会において働くような形になること、激変する時代を生き抜く子ども達のための学びの在り方として示されたのです。

【探究と問い】

深い学びのためには、子どもはどんな課題に向き合えばよいでしょうか。それは、子どもにとって挑戦できる課題であり、社会や学問の本物に出会い、自分事になる課題です。一人だけではなく、他者との関わりの中で対話をしながら「探究的に学ぶ」ことが必要です。学校に来るからこそ、仲間と会えて、お互いに生き生きして学ぶ。そのためには他者の声を聴くことから始まる。人と人が支え合い、心を一つにして、皆が同じものに耳を澄まして聴いていく。お互いの声を聴くから新たな知恵が生まれていく。これからの時代は、子ども同士学び合うことが求められますし、子ども達にとっては安心感、居場所感があって、夢中、没頭できたとき、初めて子どもの主体性は発揮されます。そうすると自然に将来に必要なことが身に付きます。

答えがある時代から、答えのないことを問うていく時代へ変わっていきます。できる・わかるだけではなく、「問いを中心とした探究できること」が大事ですし、より良質な問いにして、問い返すことができるかどうか。その時にどういふ問いがふさわしいのかという吟味も必要になってきます。

ある園の5歳児の例です。石や土に関心を持ち、電子顕微鏡、マイクロスコープで取り込んで拡大するといういろいろなものが見えてきて面白い。子ども達はまさに探究をしています。それを知ったおじいちゃんはその土地の石を持ってきました。子ども達は早速、「今

度はどうなっているのだろう」と調べます。その時に園長先生が言ったのです。「石との出会いと同じように、石を持ってきてくれたおじいちゃんの気持ちと子ども達とをどう出会わせるかも、また大事ですね。」と。物はどれも同じに扱うのではなく、そういう温かな心と知的な部分をどのように関連させ、感謝しながら学べるのか、「問い」が問われています。

これからの社会を民主的に作っていくために、自分で問うことができる子をどう育てるか。その問い方を大人と一緒に考えていくことで見えてきます。親子で道端の草について「これ何だろう」と言いながら、「これは〇〇草よ」と言ってしまふ前に、「この葉っぱ柔らかいね、色も違うね」と、子どもと一緒に考えていくだけで違います。これからの学びは、「探究の学び」を大事にしてほしいのです。

【知的に生きる楽しさ】

知的な能力と同時に大事なのが、学びに向かう力・社会情動的スキルです。エレン・ケイが、「子どもを育てるということは、子どもの中に『生きる喜び』と『希望』を育てること。」と述べています。必要なのは、知的に生きる意味があるということを感じ取り、それが楽しいことだと思える資質＝社会情動的スキルを子ども達に育てていくことです。何かを成し遂げ目標を達成すること、そのために自分をコントロールして辛抱強くやること、人とうまくやっていくこと、相手に尊敬を持ち思いやりを持てることなどです。これらが「学びに向かう力」と名付けられました。幼児期からこういう力を育てていくことで、小中高、生涯につながっていくのです。幼児期に経験した「挑戦、集中、がんばる力、諦めないでやれる力」が小学校低学年、中学年へとつながっていくことが分かっています。不思議なもので知的な能力と社会情動的スキル・学びに向かう力は一緒に育ちます。子どもの学びが大人までつながるのです。知的な能力と学びに向かう力が一緒になって学習を支え、さらにそれがその両者をまた育てていくというような関係があり、それは実は2～3歳から始まっているようです。

【意味のある時間】

学びに向かう力をどう育てるか。津守眞さんが、「大人からすると問題に見える子どもの発達や学びの危機は、4つの点が阻害された時に生じる」と言っています。

まずは存在感。先生はクラスみんなを、親は兄弟たちを見ているけど、「私自身を認めて！」という訴えです。2つ目は能動性。今やろうと思っていたのに、大人が先に言う。その子なりの理由があって動き始めたのに阻害された時です。3つ目は相互性。子どもは大人が自分の気持ちを分かってくれないと子どもなりに思う。様々な SOS を出すけれど、大人は受け止められない。その時子どもはどうしようもなくなり、大人からすると問題と思う行動に出るのです。4つ目は自我。人間には自我があり、自分らしい欲求やこうありたいというものがありますが、それを汲み取ってもらえない時です。

この4つが何か阻まれた時に、問題行動として現れ、大人からすると厄介に見える。子どもは、この4つを「認めてほしい」と思っているだけなのです。私は、子どもができていない・できていないという大人の判断ではなく、取り組もうとしている子どもの心の動きが見えることが子どもの気持ちが分かったり、理解ができていったりすることなのではないかと思っています。

ある幼稚園児の写真です。じーっと立ち止まっています。うまく縄跳びができません。実は、諦めているわけではなく彼は考えているのです。「うまくいっていない時間は、失敗している時間ではなく、成し遂げたいことに気持ちを向けて取り組んでいる時間です。うまくいっていないように見える時こそ、どう大切にするか。深い学びに向かっている時間は、これを見守っている保育者が、なりたい自分になろうとしている時間をしっかり支え、挑戦していることそのものが素晴らしいと思えるように支えてあげる必要があります。こうした時間を子どもにとって「意味ある時間」なのだと思値づけることが、子どもを理解していく上で大事なのではないかと思います。

【子どもの魅力に会う】

学校や園において何ができるのでしょうか。野中郁次郎さんが、「プロは3つの技を持っている」と言っています。

1つ目は「Art of Seeing」。子どもや専門のモノを見ることができる。2つ目は「Art of Doing」。その人に対して何かをすることができる。3つ目は「Art of Imaging, Designing」。一緒に何かをつくり上げていこうとする、デザインができる。子どもの姿を見て、どう関わったらよいかという専門家としての関わり方の技です。どう関わったらもっとわくわくして楽しいだろうかデザインできる。そうしたことがアート(技、職人芸)、人間だからこそ持っている技なのだと思います。これらの職人のような技をもって、子どもというものをどのような存在として見るのか。子どもを有能なものとして見ようということです。

「出会い」という言葉があります。「会う」と「出会う」は違う。出会うとは、自分の思いの枠から新たに外へ出て気付くことです。日々子どもの魅力に出会えていますか。つい大人は、既に作られた常識の枠で、「今までこうだったから、今度もこう」と、見え方の枠を作ってしまう。親も先生方も忙しくゆとりがないと子どもは見えなくなります。今はコロナ禍ですからなおさらです。精神的に疲れていたら、子どもをゆっくり考えてみようとはしなくなります。しかし、ゆったりとした気持ちの中で、一緒に楽しむから見えてくるし、子どもの素敵さや素晴らしさを見たり語ったりできる。出会うことができるから、子どもと一緒に学び育ち合っていくことが楽しくなるのだと思います。大人は子どもがしていること、行動だけを見がちです。あの子はどう感じていたか、何を望んでいるのかについて思いを馳せることによって、その子の存在を考えていくことができるのです。

【分かち合うこと】

私は、子どもが子どもを助けている姿が素敵だと思っています。ある子どもの写真です。教えている子も知識を単に伝えているだけではなく、相手の子の表情を見て様子を伺いながら教えているように見えます。あくまでも中心にいるのは、この困っている子で

す。子ども同士で支えているのです。そしてもう一枚。笑っています。相手が分かった時の喜びをお互いに感じているからです。「よかったね」と一緒に学び合っているから笑えている。そんな姿かなと思います。こういう場が保障できるのは、園や学校という公共の空間でなければできません。そういう学びをいかに子ども同士でできるか。分からないからこそ、必要性があって仲間と関わっていくという姿があります。

実際の子供達は、顔をしかめながら、立ち止まってちょっと考えたり、困ってみたり、様々な姿が教室の中に見られます。そういう子供達の姿を、園や学校、保護者の方が一緒になって共有する。一緒に付き合っていく、読み取っていくことが大事だと思います。子どもの思いに寄り添おうと思うから、子どもの分からなさに寄り添う姿勢、やり方が生まれていく。

私は、学びを「味わう」と言っています。どちらが上手い・下手とか、できる・できないではなく、それぞれの子どもの味わいを共有していくのです。家庭や地域社会ができることは、その学びと育ちのコミュニティを形成すること。コミュニティやコミュニケーションという言葉は、ラテン語の COMMUNIS(コムニス)からきていて「分かち合う」ことです。コミュニケーションというとキャッチボールのようなやり取りを連想しますが、みんなで分かち合っていくことなのです。子どもがいると周りが笑っているのです。子どもを中心にして、大人が喜びを分かち合うというのは、子どものこういう素敵なお姿、新しい世界と出会おうとする子どもの姿でつながっていくということなのです。子どもを中心にして先生達が輪になり、保護者の人と一緒にいることこそ大事だと思うのです。子どもを中心として、「分かち合う」ネットワークを様々な形で作っていくことが求められているのではないのでしょうか。



「ほどほどの子育ての大切さ
～アタッチメントを基盤として～」
園田 菜摘 氏



園田菜摘先生

【子育てのネガティブな感情】

みなさんは“子育て”と聞いて、どのよ
うに感じるでしょうか。ある調査結果では、
「子どもといるとイライラする」と答えた人
は 70%以上いることが示されています。
また、「子どもを産み育てやすい国だど
思う」と答えた割合は、イギリス、フラン
スでは 70%、スウェーデンでは 97%で
あるのに対して日本では半分にも満た
ないなど、諸外国に比べてかなり低い
ことが示されています。

では、なぜ日本では子育てを難しい
と感じる人が多いのでしょうか。

【子育てを困難にさせる要因】

◆孤立した育児

進化の過程では、動物は高等な
種ほど妊娠期間が長く、母胎の中で
子どもを十分に成長させることで、子
どもが生き残る確率を高めてきました。
ところが、人間は最も高等な種である
にもかかわらず、本来の期間よりも早
期に出産をするため、子どもは自分で
移動することができない身体的に未
熟な状態で生まれてきます。それは、
人間の脳が大きいため、長い期間
母胎の中で育つと、頭が大きくなり過
ぎて出産ができなくなってしまうから
です。これは、生理的早産と言われる
人間特有の現象です。身体的に未
熟であるということは、それだけ周りの
人の世話が必要になるため、人間は
歴史上、常に育児を共同で行って
きました。集団生活の中で、食べ物
を手に入れ、外敵から身を守り、子
どもを育ててきたのです。近年にな
って文明が飛躍的に進歩したからと
いって、

たった一人の親のみで子育てがで
きる状態になるわけではありません。
そのため、「育児を共同で行う」という
意識が低く、母親など特定の親だけ
が育児を行う孤立した育児が行われ
る社会では、子育てを困難に感じる
人が多くて当たり前なのです。

◆女性ならば育児ができて当然？

「母性神話」とは、女性には母性
本能があり、母親が育てることが子
どもにとって最も望ましい、という科
学的根拠のない神話のことです。こ
れは、子どもが3歳になるまでは母
親の手で育てるのが良いという「3
歳児神話」と共に、日本では多くの
人が信じ込んでいる神話になります。
双方とも、科学的根拠のない、神
話・おとぎ話で、厚生労働省も20
年以上前に「合理的根拠がない」と
否定しています。子育てとは、母性
本能ではなく、乳幼児とたくさん触
れ合う経験をする中で、どのように
子どもと関われば良いかを学んで
いくものなのです。

このことについて、私の研究室で
調査を行っています。大学生の男女
に、「赤ちゃんを可愛いと思います
か？」「育児をやってみたいと思
いますか？」といった質問をしまし
た。もし、女性に母性本能がある
ならば、女子学生の方が男子学生
より乳児・育児への好意感情が高
くなるでしょう。しかし結果は、乳
幼児との接触経験が少ない女子は、
接触経験が多い男子よりも乳児・
育児への好意感情が低い、という
ものでした。やはり、女性に母性
本能が備わっているわけではなく、
男女とも経験や学習によって乳
幼児や育児への興味・関心が高
まると言えます。

乳幼児を持つ母親を対象にした調
査では、「女性には母性愛が本能的
に備わっていると思いますか？」と
尋ねました。すると、多くの母親が
「母性本能がある」と答えるので
す。母親が、自分には母性本能が
ある、と誤った信念を持ってしま
うと、「母性本能があるのに、なぜ
自分は上手に育児ができないの
だろう」、イライラした時に「子
どもを可愛いと思えないなんて、
何てひどい母親だろう」と自分
を追い詰めてしまいます。周りの
人も、「なぜ母親なのに上手に
できないのか」と

責める気持ちを持ってしまいます。
女性ならば育児をやれて当然、と
いう誤った信念が、育児をより困
難にしているのです。

【「ほどほどの子育て」を実践！】

◆高いハードルを設定しない

子育ての目標は、最終的には「子
どもが自分一人で生きていくため
の自立の力を身に付けさせること」
ではないでしょうか。人間は社会的
な動物で、社会の中で協力して支
え合って生きています。つまり、
社会に適応して生きていく力、社
会や文化が価値を置いていること
を身に付けさせることが、子育て
の目標として重要になります。し
かし、子どもにあらゆることを教
え込むのは難しいですし、きちん
とやらせようとハードルを上げて
しまいがちです。子どもはそも
そも自分で発達する力を持っている
ので、子どもが自ら持っている
力を伸ばす、という意識を持つ
ことが大切です。大人の価値観
や行動を子どもは自ら進んで取り
入れようとするので、大人が必
死で教え込むよりも、子どもの
自発性に任せた方が多くを身に
付け、それが子どもが社会に
適応していく力になるのです。

◆アタッチメント対象になる

子どもは、危ない時や不快を感じ
た時に、「不安」を感じます。その
際、大人がその危機から子ども
が脱するような関わりを繰り返
すと、子どもは「この人のそばに
いれば大丈夫」と「安心感」を持
ちます。危機的な状況にならな
い時でもこの人のそばにいれば
安心なので、「くっついていたい」
という感情を持ち、その人が近
くにいないと泣く、ハイハイで
後追いをし、抱っこをせがむと
いった行動をします。これがア
タッチメント行動であり、その
特定の人をアタッチメント対象
と言います。

アタッチメント対象がそばに
いると、子どもはその人を安全
基地にして外の世界を探索する
ことができます。周りの新しい
世界に興味を持って探索をし
に行き、上手いかなかったり
怖かったりした時に、安全基
地であるアタッチメント対象
のところに戻って安心感を得
るのです。つまり、アタッチ
メント対象がいるからこそ、
その人を安全基地

にして安心して周りの世界を探索することができ、徐々に自分の世界を広げ、発達がうながされていくのです。子育ての関わりとして大事なのは、大人が何を教え込むかではなく、アタッチメント対象として、子どもが安心して探索できる環境を作ることなのです。

◆関わりのポイント

①「敏感であること」

子どもは、不快な時や不安な時に、泣くなどのシグナルを出します。それに対して敏感に気が付くことです。「今どうしてほしいのか」を適切に読み取り、すぐに応えることが重要です。子どもは「シグナルさえ出せば、応えてもらえる」と安心感・信頼感を持つことができます。

②「侵害的でないこと」

「侵害」とは、あれこれと手を出しすぎることで、「○○しなさい」「××はしてはダメ」と、子どもがチャレンジする前に過剰に制限をかけることです。子どもは自ら発達する力があり、周りの世界を探索することがその原動力となります。子どもに手を出し過ぎてしまうと、子どもが自発的に発達しようとする力を摘み取ってしまうことになります。

③「環境を構造化すること」

子どもが「やってみたい」と思う環境を整えることです。子どもを読書好きにさせたい時に、「本を読みなさい」と言ってもあまり効果はありません。それよりも、子どもが自ら興味を持った本を気軽に手に取れる環境を整えたり、大人が子どもと一緒に本を読んであげることで、本を読む楽しさを知り、自発的に本も読むようになります。

④「情緒的に温かいこと」

例えば同じ「抱っこ」でも、どのような気持ちで行っているかによって、子どもの受け止め方に違いが出ます。温かい気持ちで関わることは、子どもが安心感を持つことにつながります。

【1人で頑張らなくてはいけない】

◆「学びの途中」と自覚する

子育てをしっかりとやりたいと思うことは大事ですが、そもそも大変な子育てを「一人でやらなければ」とする必要はありません。誰でも最初は初心者なので、分からないことが多くて当たり前

です。「子どもと一緒に成長していく」「自分も学びの途中にある」と考えることが重要です。積極的に周りの人からのサポートを得て、「どうすれば良いか」をみんなと一緒に考えていくことです。

◆サポートは共感的に

周りの人からのサポートは、育児ストレスを下げる分かっています。子どもの面倒を見る「物理的なサポート」も大事なのですが、それ以上に大事なのが「情緒的なサポート」です。子どもと日々関わる際にはストレスもありますが、サポートを受けることで「自分は一人ではない」と感じることができます。

例えば、母親が子育ての悩みを言った時に、「もっとこうすればよい」とアドバイスをする場合があると思いますが、実はそれは情緒的サポートではありません。なぜならば、「こうすればよい」というアドバイスは、母親のやり方が悪いのでうまくいかない、という否定的な評価が暗に含まれているからです。アドバイスがどれだけ正しい内容でも、それを言われた母親は自分への自信を失うことがあります。「是非その通りにやってみよう」と積極的に思えなくなってしまうのです。情緒的サポートとは、「あなたは一人ではありません。一緒に子育てをしましょう」というメッセージを伝えることです。大事なのは、例えば「子どもが泣きやまなくて大変だった」と母親が言った時に、「子どもが泣きやまないと本当に大変だね」と“共感”をすることです。共感してもらえると、「大変さが分かってもらえた」「こういう時に自分が大変だと感じるのは当たり前なのだ」と感じられ、ストレスが下がっていきます。

◆生まれつきの気質

子どもは生まれつき個性があり、1人1人違います。知らない場所に行っても積極的に遊べる子と気後れしてしまう子、激しく泣く子と穏やかな泣き方をする子など、様々です。親は自分のしつけ方や育て方のせいだと思いがちですが、これは生まれつき持っているその子の気質かもしれません。生まれつきの気質なのに、「大人の関わり方のせい」と思い込んでしまうと、

必要のない罪悪感を持つことにもつながります。

子どもは1人1人違うので、他の子どもと同じようにしなくてはと思いついては、その子の持っている個性を伸ばすことを意識した方が上手いききます。子どもは柔軟性が高いので、いつでもやり直しは可能です。子どもへの見方や関わり方をちょっと変えてみませんか？

◆プラスでマイナスをカバー！

思わず感情的に叱り過ぎたり、良い関わりができずに落ち込むこともあるかと思います。私達にも感情があり、イライラしたり、理想通りにできないこともあるでしょう。ここで肝心なのは、マイナス面を出したらダメなのではなく、マイナス面を出しても、それをカバーするくらいプラスの関わりをすれば、差し引きでプラスになるということです。子どもは、親に叱られて泣いているのに、その親に甘えてくることがあります。それは親が不安を取り除いてくれるアタッチメント対象だからです。強く言い過ぎたと思うなら、「さっきはごめんね。よしよし」と慰めてプラスの関わりをしてあげるなど、子どもと共に成長していく姿勢があれば良いと思います。

◆社会の中で見守られること

これからは、積極的に子育てのサポートを求められる社会にすることが重要です。そのために、サポートが必要な時はぜひ積極的にお願いしてみましょう。周りの人達が、不安を取り除く安全基地のような関わりを普段からしていると、サポートも頼みやすいですね。「自分はこんなに見守られている。もう少し頑張ってみようかな」と思える関係性を作れると、上手いくのかなと思います。

